

氏 名 牧野 遼作

学位(専攻分野) 博士(情報学)

学位記番号 総研大甲第 1933 号

学位授与の日付 平成29年3月24日

学位授与の要件 複合科学研究科 情報学専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 身体配置による相互行為の協同構築過程の解明

論文審査委員 主 査 准教授 宮尾 祐介
教授 山田 誠二
准教授 坊農 真弓
准教授 稲邑 哲也
教授 古山 宣洋 早稲田大学
教授 傳 康晴 千葉大学

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

本稿は、会話中の人々の立ち位置や手の位置といった、基本的には維持されているが、しばしば変更される身体位置に着目したものである。個々人の立ち位置や手の位置は、その組み合わせによって特定の陣形・パターンを形成する。この陣形・パターンを身体配置と呼称する。

身体配置に関する先行研究としては、Kendon (1990) の F 陣形の研究が挙げられる。Kendon は、パーティー場面などの観察を通して、複数の人々が会話を開始し、展開させ、終了するまでの間、立ち位置によって陣形を形成し、維持していることを明らかにした。この陣形は F 陣形と呼称され、相互行為を展開するための基盤を構築するものである。F 陣形は、会話参加者が自身の前方に広がる操作領域を互いに重ね合わせるように立つことによって形成されるものであり、参加者の移動、新たな会話参加者やこれまでの会話参加者の撤退ということが起こるたびに、参加者たちは、ある人が前方に移動したならば、他者は下がり、ある人が左右に移動したならば、他者も合わせて左右に移動するというように、互いの立ち位置を調整し、会話が展開され続ける限り、F 陣形を維持しようとする。以上のような、互いの身体動作による連鎖構造は、これから行う／いま行っている活動をどのような活動として位置づけるべきなのかを、互いの身体を通して示し合うものであり、ある活動を相互行為として位置づけ、その基盤を構築するものといえる。本研究では、以上を踏まえて 3 つの研究を実施し、Kendon の F 陣形の検討、及び構造的アプローチの拡張を行った。

研究 1 では、立位会話の中で、活動の変化が起こる場面に着目し、その中での立ち位置が、どのように調整されているのかを検討した。Kendon は、会話のための基盤を立ち位置からなる F 陣形としつつも、会話に特権的身分をもつ参加者がいるとき、異なる陣形が生起する可能性を示唆していた。そこで、日本科学未来館において、科学コミュニケーター（以下、SC）と呼ばれる職員が、来館者に対して行う展示物の解説場面の分析を行った。その結果、展示物解説が開始される前まで F 陣形を維持していた SC と来館者たちは、解説が開始される前に、SC が来館者とは異なる立ち位置となるように、互いの立ち位置を調整していたこと、また解説がなされている間、その陣形を維持するように移動していたことが明らかとなった。以上により、立ち位置による陣形は、単に会話集団を他と区別する相互行為の基盤であるだけでなく、これから行う／今行っている活動の変化に応じて変化することであることが示されたのである。

研究 2 では、研究 1 の結果を踏まえ、立位会話以外、すなわち座位会話において、相互行為の基盤を形成する身体配置について検討を行った。座位会話では人々は立ち位置をあまり調整することがない。身体配置によって、これから行う／今行っている活動をどのような活動として位置づけるかについて参加者間で交渉し、相互行為が展開する中での活動の変化を反映しているとすれば、座る位置以外の身体ないしは身体部位の位置を利用した身体配置の交渉がなされている可能性が考えられる。そこで、本研究では人々の手の位置の組み合わせに着目した。この手の位置が座位会話において、立ち位置の代替となり

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

うるならば、先行研究と研究 1 で示された方向性に沿ったかたちで、「異なる手の位置の参加者が会話の中で異なる役割を担う」ことが観察される可能性がある。そこで、実験室での 3 名の雑談から、一人が語り（思い出話など）をする場面を抽出し、その前に、どのような手の位置の組み合わせがあるのかについて、量的な分析を行った。結果、語りの前に、一人だけ異なる手の位置の参加者が含まれる手の位置の組み合わせパターンが多く生起する傾向が見られ、さらに事例について質的検討を行った結果、参加者たちが、手の位置の組み合わせを利用し、語り手となること、または語り手となることを避けようとするのが示された。

以上の結果は、座位会話において手の位置が立ち位置の代替をしていることを示すとともに、これまでの相互行為研究において扱われてきたジェスチャー、視線などの人々が何を指し示しているのかという人の志向が記述可能な身体の振る舞いに対して、手の位置という、それ自体では人の志向として記述困難なものが、どのような条件のときに記述可能になるかを示したものである。つまり、身体配置は一人だけ位置の組み合わせパターンと、全員が同じ位置の組み合わせパターンの対比構造に基づき記述可能となるのである。

研究 3 では、身体配置の 2 つのパターンがどのような構造をもっているかについて、収録会話の冒頭場面の分析を通して検討した。一人だけ位置の組み合わせパターンと全員が同じ位置の組み合わせパターンは、形状という観点では、前者は後者に基づき認識可能なものとなっているといえる。さらに、これらのパターンが結びついている活動は、研究 1 と研究 2 では、前者のパターンは語り、後者は雑談という活動であった。研究 3 では、収録される活動自体は後者のパターンに結び付けられ、前者のパターンはそれ以前の活動や収録される中での特定の活動と結びついていることが示された。以上の結果より、一人だけ異なる位置というパターンとそれに結びつく活動は、全員が同じ位置というパターンとそれに結びつく活動に基いており、前者は有標状態となり、後者は無標状態と呼べる対比階層構造をもっていることが示された。

以上の研究を通して、Kendon の F 陣形に関する研究を、相互行為内での異なる活動への変化と陣形変化の関係、座位会話における立ち位置の代替としての手の位置の組み合わせという形で拡張し、その上で、相互行為中の身体が無標であることが、相互行為の基盤となりうる可能性を示した。

博士論文審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

2017年1月30日、申請者の博士論文審査を実施した。本博士論文は全8章からなり、第1章では情報学および人文科学における相互行為研究が概説され、第2章では本論文の方法論的背景が示され、第3章では用いるデータの概要が説明された。続く第4章、第5章、第6章ではそれぞれ個別の分析とその結果が示され、第7章では分析の総合考察が示された。最後の第8章は第1章で概説した先行研究に対する本論文の貢献が明記された。本論文は全体として、言語コミュニケーションにおける会話や語りといった相互行為を協同で構築する過程と身体配置の組み合わせパターンの関係性を明らかにすることを目的としている。参加者が短い発話でターンを交代する会話では、参加者は特段制約がない場合、いわゆる輪を囲むようなかたちでお互いの身体的位置を調整する。このような「陣形」は特に「F陣形システム(Kendon, 1990)」として研究されてきた。本研究は、会話から、1人の話者が比較的長く発話する語りや解説へ移行する際に、当該語り手が他の参加者とは異なる身体配置を行う「H陣形」を取ることを明らかにした。研究1では、日本科学未来館の科学コミュニケーター1名と来館者2名の立位による会話から展示物解説に移行する場面を含むデータを対象に、会話のときにとっていたF陣形が、解説に移行するとき、及び解説が続けられる限りはH陣形がとられることを明らかにした。研究2では、千葉大学3人会話コーパスを対象に分析を行った。座位会話では身体位置は大きく変えられないという制約があるため、「手の位置の組み合わせ」に着目し、手の位置が一人だけ他の参加者と異なる者が語り始める傾向があることを定量的に示した。研究3では、研究1と研究2と同じデータを用い、「身体配置に内包される階層構造」を検討した。具体的には、F陣形が無標であり、H陣形が有標である可能性を定性的な分析によって示した。以上の研究を通して、本論文は、F陣形研究を、相互行為内での異なる活動（会話から語り）への変化と陣形変化（F陣形からH陣形）の関係、座位会話における立ち位置の代替としての手の位置の組み合わせ、という形で拡張しただけではなく、相互行為のなかで身体配置が無標であることが、相互行為の基盤となりうる可能性を示した点において、学術的な意義がある。質疑応答では、各審査委員が申請者に本論文の独創性、学術的な意義、方法の妥当性、各概念の定義、今後残された課題などに関する質問をし、申請者はそれらの質問に的確に応答した。研究1の成果の一部は以下の1の論文誌に研究3の成果の一部は以下の2の論文誌にそれぞれ掲載されている。

1. 牧野遼作・古山宣洋・坊農真弓(2015), フィールドにおける語り分析のための身体の空間陣形: 科学コミュニケーターの展示物解説行動における立ち位置の分析, 認知科学, 22(1), pp. 53-68, (査読付き)
2. 牧野遼作・阿部廣二・古山宣洋・坊農真弓(2017), 会話における“収録される”ことの多様な利用, 質的心理学研究, 16, pp. 25-45, (査読付き)

また、次の国際会議での発表も採択されており、研究能力があることを確認した。

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

3. Ryosaku Makino, Nobuhiro Furuyama(2013), “Home position-formation: as a combination of multiple participants’ home position, ” The international Workshop on Multimodality in Multiparty Interaction (MiMI2013), pp. 64-74
4. Ryosaku Makino, Mayumi Bono (2017), Using relationships as an interactional resource in multiparty Japanese conversation involving children, The 15th International Pragmatics Conference(15th IPRA). (July 16-21, 2017, Belfast, Northern Ireland) (査読付き)

以上の結果、申請された博士論文は博士(情報学)の学位を授与するのに十分な内容を含むものとして、合格と判断した。